平成 30 年 7 月豪雨　救護班（初動班）活動報告

国内救援課　主事　仁田　涼子

日赤岡山支部でﾌﾞﾘｰﾌｨﾝｸﾞを受ける

平成 30 年 6 月 28 日以降の台風第７号や梅雨前線の影響によって、西日本を中心に全国的に広い範囲で記録的な大雨となり、全国各地で甚大な被害が発生した。日本赤十字社第４ブロックは町の４分の１以上が浸水し、多くの犠牲者が出た岡山県倉敷市真備町を中心に、医療救護班を派遣している。私は、7 月 12 日から 15 日までの３泊４日、初動班の事務管理要員として岡山県倉敷市真備町を中心に活動した。

泥水にかろうじて民家の屋根が見える衝撃的なニュース映像から５日目。大阪から岡山へ向かう高速道路上では、災害派遣とかかれた自衛隊、消防、警察等の車とすれ違った。これから活動しようとしている被災地の現状を現地で活動する日赤救護班からの情報では、掴みきることができなかった。「医療ニーズはあるにはある」この言葉をどう捕らえたらいいのだろうか、私たちに求められている活動は何だろうかという思いを抱えて日本赤十字社岡山県支部（以下、日赤岡山支部）に到着した。そこで簡単な概要説明を受け、拠点本部である倉敷市保健所に向かった。倉敷市保健所の中には「倉敷地域災害保健復興連絡会議（KuraDRO）が発災当初から立ち上がっており、多くの情報が集まっていた。しかし情報が多すぎて取捨選択ができない。これが刻一刻と状況が変化する災害医療現場なのだと痛感させられた。日赤の救護班をコーディネートしている熊本赤十字病院のスタッフから状況説明を受け、テレビで放映されている真備地区のほかに、甚大な被害が発生している地区があることを初めて知る。「呉妹地区」、報道されていないことから支援の手が今までほとんど入っていなかったという。避難所ではない、神社や寺に住民が避難している。町の医療施設は豪雨の影響を受け、使用不能。しかしこの地区に住んでいる方は、今まで市からの支援を受けられなかったことに複雑な気持ちを抱えている。この情報を聞き、もしそこにアセスメントに行くことになったら、どのように住民の方と接し、彼らの抱えているニーズを聞き出したらよいのか、と不安が頭によぎった。日赤が職種に関係なく救護員全員に受講を必須としている「こころのケア」研修はこのときこそ役立つものであると思った。結果として、呉妹地区ではなかったが、初日は２チームに分かれ３つの避難所のアセスメントを行った。避難所では、事務管理要員であっても被災者の人と話をする機会がたくさんあり、もっとこころのケアについて勉強をし、積極的に関わっていきたいと自分の中での課題が見つかった。

２日目以降、私たちのチームは被害が一番大きい真備地区に入ることになった。活動場所である倉敷市立岡田小学校では、dERU 展開の可能性も含めたアセスメントチームと、診療チームの２つに分かれて活動を行った。更に３日目からは夜間の医療ニーズに対応するため、夜間診療を開始した。私は診療チームの事務管理要員として患者データの収集を行った。岡田小学校避難所では、TMAT（徳州会グループ）と岡山日赤救護班が既に診療を開始しており、私たちは岡山日赤救護班指示のもと、TMAT と一緒に診療にあたった。日付ごとに分類されているのか、名前ごとに分類されているのかわからない膨大な診療記録が山積になっている。今まで診療した患者のデータはその診療記録のみ。当院看護師が山積になっているカルテをあいうえお順に並びかえる、事務管理要員が診療した患者データをエクセルにまとめる。その作業をするだけで一日があっという間に過ぎてしまった。一方で岡山日赤の主事が中心となり、診療記録を参考に手書きで患者リストを作成している事実を知る。情報共有の難しさを痛感させられた。大阪でまとめたデータで管理してはどうかと提案するも結論を出すことができず、次の班に引き継ぐことになってしまい反省点が残った。

KuraDRO で避難所概要の説明を受ける

今回私は熊本地震につぎ、２回目の派遣となる。派遣された岡山県は私の生まれ故郷である。岡山県は「晴れの国、おかやま」といわれており、災害は少ない地域だ。しかし私の目の前に広がった真備地区の景色は私の知る岡山ではなかった。真備地区へ入る橋を渡ると被害の甚大さに言葉を失う。川は濁り、木がなぎ倒されている。道路は泥が残り白線が見えない。動かなくなった車両が道端に放置されている。そこには非日常の世界が広がっていた。屋根の上にちゃぶ台が転がっていたり、新築の家から泥まみれの家財が道路に捨てられたりしている。家の壁には水位をあらわす泥の線、その高さは家屋の１階をゆうに越えている。これだけの人が生きていることすら奇跡に思える風景。日中避難所には高齢者しかいない、動ける人は皆家の片付けや仕事に出かけている。炎天下の中、必死に片付け熱中症で倒れる被災者、手にとげが刺さる被災者、休みなく家にも帰れず心身ともに疲れきった市の職員が診察に来た。みんな真備が大好きで、真備に住み続けたいという強い思いが伝わってきた。復興には２ヶ月以上かかるといわれている。現地は４０℃に迫る日が続いている。一日でもはやく安心して真備に住む日が来るように、日赤職員として、岡山県民として、私に出来る支援は何か考えていきたいと思う。

豪雨の爪跡が街中に残る